

少年の戦い

吉原 洋子

彼は三年生まで学校が大好きな少年だった。四年生になり、担任が変わり、彼の学校生活は一変した。一学期が始まり、算数の時間に彼は、納得ができなかったのか、質問を繰り返した。授業が進められなくなった担任は、机と椅子を廊下に出し、そこで授業を受けるように指示した。担任から、親に連絡があり、彼も納得したのでこうしたと言う。母親は、何も言わなかった。その後、担任は毎日のように彼の教室での状況を電話で連絡してきた。彼には直接話すことはなかった。母親は、その都度彼を叱るだけだった。母親との信頼関係はなくなり、連絡してくる担任にも不信感を持った。やがて、宿題をしなくなり、授業も受けなくなった。授業中、教室を出て、廊下に座っていた。担任は彼に何も言わなかった。両親は、校長を交え彼のことを話したが、担任は何故彼がそうしているのか考える気は無かった。担任はただ、特別支援学級に行くよう勧めた。それでも彼は休まず登校した。

二学期の後半に、校長と担任から呼び出された両親に、「発達障がい」の検査を受けるように言われた。学校の対応を見て、父親は「このままでは、子どもをダメにされてしまう」と立ち上がった。彼が何かすれば、まず本人に直接注意し、親の元に文書で知らせて欲しいと言っ

た。担任は時間が無いと言って文字で残すことは納得しなかった。これ以後電話連絡は少なくなった。

父親は彼と話をし、病院へ連れて行き、医者診断を受けた。医師は「病気ではなく、頭のいい子だからこうなった」と言われた。

そして、冬休み田舎のじいちゃんのところに来た。彼は自分の思いを話した。廊下に一人出されたこと、クラスの中でのいじめ、授業中皆が遊んでいても先生は何も言わない、何もしてくれない。お母さんは叱るだけ、先生も校長も信用していない。お父さんは何度も学校に行って、話してくれた。でも、両親にも不信感を抱くようになっていた。彼の話を聞いて、じいちゃんは彼が生まれた時からの写真を見せて両親に愛されて育ってきたか話をし、自分を大切にすることを話した。学校は決まりを守り、みんなで楽しく過ごす所、自分の気持ちは人に伝えなければ誰も分かってくれない事を。

三学期になり、少しずつ授業に出るようになった。担任との関係はうまくいかなかったようで、週一度の学校からの連絡は続いた。

春休みコロナ休みがあげ、五年生になり、担任も変わり、今までのことがなかったかのように、勉強に運動に頑張っている。両親や本人より、驚いているのは学校のようだ。彼は、一言「僕が勉強するようになったら、先生も友達も僕に対する態度が変わったよ」と。

彼は一回りも、二回りも成長していた。